

## シーズレクのサガ 八四〜一三六章

### ヴェーレントの物語 (その二)

石 川 光 庸

(その一) に対する補注

95 《ヴェーレントが王のためにナイフを作ること》の章で、ヴェーレントは不注意から失なった王のナイフをこしらえるために、おかかえ鍛冶アミリアスが留守の間にその仕事場に行き、ナイフを作り、「その後で三稜形(A・B本では三頭形)の釘を一本打ち上げ、かなしきの上に置いておく。だがこんなに美事に鍛えられた品を見た人は、前にも後にもありはしなかった。」このように羊皮紙本 Mb では「三稜形の釘」はこれ以上言及されことなく、いわば *blindes Motiv* として止まるが、アイスランド語紙写本 A と B では次のように語られ、紙写本書記者のより緻密な書記態度がうかがえる。「さてアミリアスは徒弟たちと共に鍛冶場にもどり、三頭形の釘 (*nacla vð þriu höfudum*) を見つけて、誰がこれを打ったのかと尋ねる。だが誰も名乗る者はおらず、このような形に打たれた釘は、前にも後にも彼は(A)「彼等は(B)」見たことがなかった。」(*Berðsen, S. 87*) もともと、アミリアスがヴェーレントをライバルとして意識するのは次章からで、不思議な三稜形の釘はこれ以上物語の筋になんのかかわりももたない点、A B 両写本においてもやはり *blindes Motiv* である。

101 《ヴェーレントが作った人形の話》の章において、鍛冶道具を盗んだ犯人を見つけれなかったヴェーレントは、記憶をたどってその犯人にそっくりな人形を作る。暗がりに立つ人形を王は遠国からもどった臣下のひとりと錯覚して話しかけ、これによって犯人が判明する。——このエピソードは H. Schuck と F. Panzer によればプリニウスの『博物シーズレクのサガ 八四〜一三六章

物語』に紹介されて広く世に知られるギリシャの名人画家アペレス Apelles の逸話を手本にしたものだという。アペレスはエジプトのプトレマイオス王と不仲であったが、あるとき画家のライバルたちは「意地悪くも王の道化師を唆して、彼（アペレス）のところへ（王の）正饗の招待状を持って行かせた。アペレスはそれにしかけて行った。プトレマイオスはいたく機嫌を損ね、接待の給仕たちに列を作って歩かせてアペレスに見せ、そのどの者が彼に招待状を与えたかを言わせた。アペレスは妬から消えた木炭を一片拾い上げ、壁に似顔を描いた。王は、彼がスケッチを始めるや否やそれが道化師であることを悟った。」（第35巻89、中野定雄他訳『プリニウスの博物誌』）プリニウスは中世全体を通じてよく読まれたが、殊に十三世紀には愛好された（F. Panzer, *Zur Wielandsage*, S. 135）のだから、サガ作者がこれを手本にしたことは考えられる。ただし、王が暗がりに立つ人形に親し気な口調で話しかけるところや、ヴェーレントのそれに対する皮肉な返事は、サガ作者の独創にちがいない。

# 《ニズング王出陣のこと》

112 ある日のこと、王が食卓についているところに、人々がやってくる。そして大きな軍勢が王の領土内に侵寇してきて、すでに大きな損害を与えた、と伝えた。ニズング王はそこで軍兵を召集し、敵の軍と会戦する地点にいたるまで、五日の間ひたすらに進軍する。晩になって野営天幕が張られたとき、王は自分の勝利の石を持ってこなかったことに思いついた。この頃は、それを身につけていれば勝利を得られるという魔力をもった石の類を、君主たちは所有していたのである。だから出陣のときや、苦況に立った場合などには、好んでこの石を帯びたものであり、またそもそも武人を自覚する者はこれを身につけていた。石それ自身にそのような魔力がはたしてあったのか、それとも石に寄せた信仰がそうさせたのか、私にはわからぬのであるが、自分の勝利の石を館に置き忘れてきたことは、王にとっては実に不吉なことと思われる。そこで彼は顧問官と寵臣とを召集し、だれであれ明朝太陽が東に昇る前に石を持ち帰った者に、領国の半分と自分の娘とを与えようと申し渡す。これに心を動かされた者は多かったが、与えられた時間がかほどわずかでは、この道のりを克服できる自信のある者としてない。そのうちに晩になる。

## 訳注

- (85) *stapstein*…おそらくお守りの一種で、あらゆる魔除けに効があるという雷神トールのハンマーや、太陽を形どった石や琥珀白の首飾りなどであろう。スカンディナヴィアや北ドイツから大量に出土する。

(36) natura : このサガ物語の種本となった中低独語の物語にも、おそろくこのラテン借入語がすでに使われていたのだらう。

(37) et orrost menn varo : 直訳すれば「戦士であるときば」。orrost は独 Ernst や英 earnest と同源で、原意は「激しい動き、戦闘」である。

(38) 十三世紀ノルウェーの（おそろく）修道士である語り手がたいそう理性的な、ほとんど近代的な立場から「私」を主張している珍しい箇所。羊皮紙 Mb 本にしかない。

《ニズング王、ヴェーレントに王女を与える約束をすること》

113 王はだれもこの使いを引き上げる決心をしないのを見て、ヴェーレントを呼び出し、こう言った。「良き友、ヴェーレントよ。この使いを引き上げてくれぬか？」ヴェーレントは答えた。「殿様、お約束を守ってくださるなら、お望みどおり参ります。」「すると王は言った。「わしが申したことは、すべてわしは実行するであらうぞ。」そこでヴェーレントは、彼の名馬スケミングに打ち乗って出発する。彼はこの名馬を南国から、——すでに以前に語ったように——あのストウダル老人が管理していた養馬場から得ていたのである。この馬の速いことは飛鳥の如くであり、またあらゆる点で立派でもあり、美しくもあった。

#### 訳注

(39) Stemningr : ヴェーレントの息子ヴィズガ Viðga (中高独語 Wi(c)ge) の父譲りの乗馬として知られる名馬。しかしここでの登場はいかにも唐突である。この名はおそろく skennir 「速い」から作られたのであらう。

(40) Sudarr : ブルンヒルト女王の領地に農場をもっている老人で、良馬を飼育し訓練する名人。その武骨な息子ヘイミル Heimir はヘルンのディートリヒ(シーズレク)とはば互格の勝負をした後、ディートリヒの近臣となった。Sudarr とこの名はおそろく stecda 「雌馬」(独 Stute) から。

《ヴェーレントがニズング王の勝利の石を取りにもどること》

114 ヴェーレントは夜になって出発し、王が軍勢を率いて五日を要したところを一夜で通ってしまう。<sup>(41)</sup>真夜中には王の城に着き、勝利の石を取って駆けもどり、太陽が東に昇る前に王の野営地に帰り着く。ヴェーレントが彼の乗馬スケミングをしきりに

跳躍させていると、七人の男が馬に水を飲ませようとして、王の野営地から彼の方にやってきた。

訳注

(41) このあたりの時間と距離は不正確である。紙写本 A B では、王の軍勢が四日要したところを一昼夜駆けつて王の城に着くことになっている。メルヒュンの要素が色濃い。

(42) *burdia* (*burdigia*): 「(馬上試合で) 馬を跳躍させる」古仏語 *bouhoulder* から中高独語 *buhurdieren*、中低独語 *bordren* を経て北欧語に入った典型的な南欧風宮廷叙事詩用語。ヴェーレントを文武両道の「騎士」に仕立てようとする意図が見える。

《王の内膳頭、ヴェーレントのもとに来て勝利の石を自らが得ようとすること》

115 彼らの頭だった者は王の内膳頭であった。彼らはヴェーレントの前に馬を進めて彼に挨拶し、彼も返報する。すると内膳頭が言った。「良き友よ、勝利の石をここにお持ちか。あの道のりをかくもわずかな時間で駆けられたとは、実に貴公は万事において万人に優れた人物であるな。」ヴェーレントは答えた。「私も石がこれここにあることを望みますし、お使いの役目をできるかぎり完璧になしとげたものと思います。」すると内膳頭は言った。「勝利の石はわしに渡すがいい。王にはわしがついていきたいのだ。そのかわり貴公には、望むかぎりの金銀を進呈しよう。」ヴェーレントは内膳頭に答えた。

訳注

(43) *dróttinn*: 古高独語 *truhazzo*、中高独語 *truhese*。古ノルド語末期に中低独語から取り入れられ、ドイツ中世叙事詩の色が濃い単語である。原意は「軍勢の前に位置する者」だが、宮廷騎士文学において「宴席をつかさどる者、内膳頭」の意味となり、さらに「家宰、家老」ほどの役職名ともなった。

(44) 紙写本 B には「金銀およびわしとの親交 *vinnu* を」となっていて、内膳頭の尊大さが表現されている。

《ヴェーレントが石を渡さぬこと》

116 「あなたも私と同じ距離を走れたはずですよ。私の手からこの石を取ることができるとは思えませぬ。他の者がこの石を取ってきたのに、しかもこのような状況のもので、そんなことを要求されるのは、騎士の作法ではありますまい。」すると内膳

頭は言った。「つまり鍛冶屋の分際で、この国の名流の者たちすらまた手のとどかぬ王女を手に入れようなどと望むとは、無知もはなはだしいものだ。いっそのこと貴公には、ひとつ辛き目を見せてやることにしよう。さあ者ども、劍を抜け！ 奴に勝利の石と、おまけに自分の命までも差し出させるのだ！」

#### 訳注

(45) *kurtis* : 93章の訳注21参照。

(46) *smðr einn illi firir þer* : 以前の章の表現によれば「優雅な作法を身につけた小姓」(*vel vðr oc kurtis sveinn*, 93章)だったはずの、「もとの家柄がいい」(*gilla ættir*, 94章)はずの、そして文武両道にたけた騎士らしい振舞いをするヴェーレントの、宮廷における本当の身分がここで露呈する。ヴェーレントは「ニズング王のもとで丁寧に、名譽をもって待遇される。彼はすべての男の中で最も技にたけ、最も名高い者」ではあったが(12章)、最終的には高級な騎士からは差別される技術者にすぎなかった。

《内膳頭がヴェーレントから石を強奪しようとする事》

117 そこで彼らはヴェーレントに打ちかかる。彼は自分の名劍ミムングを抜き、内膳頭その人の兜に切りつけて、頭を二つ割りにする。内膳頭は即死して落馬する。後にいた六人は逃げてしまふ。そこでヴェーレントは王に会い、勝利の石を彼に手渡す。王は喜んで彼をむかえる。そこでヴェーレントは王に旅の一部始終を話し、また、内膳頭を斬り殺したことも話す。すると王は言った。「言語道断！ お前はわしの最良の、そして最愛の家来を殺したのだ。即刻出て行け！ 今後は二度とわしの目の前に出るな。すぐに出て行かぬなら、縛り首にし、最低の盗人として死なせてやるわい。」

#### 訳注

(47) リアリスティックな描写で話を面白くする傾向のあるA本とB本では、内膳頭を真向唐竹割りにした劍が鞍に喰い込んだとか、もう一人の首をその乗馬の首とともに切り飛ばしたとか、講談調の描写が続く。

《ヴェーレントが王の怒りを買うこと》

118 そこでヴェーレントは王のもとから去り、こう言う。「王よ、私たちの間の約束を成就させたくないゆえに、このような仕

打ちをするのだな。しかし、たとえこの件が私にはそれほど不愉快ではないとしても、誰でもが満足するというわけにはいかぬぞ。」そうして恥ずかしめられたヴェーレントは、王の前を立ち去る。さてニズング王はその同じ日にヴァイキングたちと会戦し、ニズング王が勝利を得、領土から敵を追ひ払い、平和をもたらし、大きな名譽をもって帰城し、すべてをうまくやってのけたと信じる。こうして、誰もヴェーレントがどこに行ったのか知らぬまま、しばらくの時間が過ぎるが、しかしニズング王は自分の領国にいる。

訳注

(48) これまで王を敬称 *kyr* で呼んでいたヴェーレントは、この箇所から対等称の *kon* に切りかえる。

《ヴェーレント、ニズングに裏切りを企てること》

119 ヴェーレントにとっては、王の不興をこうむり、しかもその身は追放者となったことが、まったく腹にすえかねる。そこで彼は復讐を目論み、ある日王の館にこっそり変装して出かけ、調理場に行つて自分は料理人だと言ひ、そこに入りこんで、他の料理人と一緒に食物を焼いたり煮たりする。

さて料理が王と王女の前に運ばれて来る。彼女はナイフを取つて、前に置かれた皿の肉を切ろうとする。だがこのナイフの特性は、何か不純なものが食物に混っていると、ナイフの柄が鳴り出すというものだった。今や王女は毒が食事に盛られているのに気づき、父にそれを言う。彼は怒り、犯人を探させる。するとヴェーレントが見つけれられ、王の前に引き出される。王はこう言う。「ヴェーレントよ、悪事を為したとはいえ、お前の腕に免じて命ばかりは許しておくぞ。」彼は王の前に引き据えられる。

訳注

(49) *svik* : 「裏切り、欺満」であるから、サガの語り手がヴェーレントの企てを否定的に見ていることがわかる。また *svik* には「毒」の意味もあり、「ニズング王に毒を盛ろうとすること」とも解釈できる。

(50) *fridlaus* : 法による保護を受けられないアウトローの状態。殺害されても文句は言えず、食物を施してもらうこともできぬ。

(51) *ivagfyr* : 中低独語 *junkvrouwe* からの借用語で、たいていは非北歐圏の王朝の王女に対して用いられる。

(52) あたかもニズング王がやもめで、娘との二人暮らしであるかのようなのである。後章でも王子は登場するが、『エッダ』の

「ヴェルンドの歌」で重要な役割をはたす王妃には一言の言及もない。

- (53) A写本ではこのナイフは「小人たちがこしらえた」ことになっている。鉄の持つ力に悪魔払いの呪性を託す信仰は、世界にある。(ドイツ迷信辞典IV 一八九以下)

- (54) 羊皮紙本 Mb にはこの「毒」がどんな毒なのか触れられてなく、そもそもヴェーレントが毒を盛ったことも明言はしていない。これに対しアイスランド語紙写本ははるかに詳細で、「鍛冶屋ヴェーレントと夫婦になれなければ生きていけない、という気にさせる毒」、つまり媚薬を、ヴェーレントは王女の食事に仕込んだと明示している。さらに紙写本では、一度魔法のナイフによって失敗したヴェーレントは、そっくりなナイフを作って本物ととりかえ、二度とナイフが鳴ることのないようにして媚薬を仕込むが、結局は聡明な王女にやはり見破られる……という、以前の数章と同工異曲の陳腐かつ末梢的な描写に、ページが費やされている。

いずれにしてもこの箇所は、媚薬や魔法のナイフなど多くのメルヒェン・モチーフを取りこんで話を面白くしているが、要はただヴェーレントが足の腱を切られて強制労働させられるに至る前史を語ることにある。毒を盛る、などという英雄にあるまじき行為に及ぶヴェーレントの姿は卑小であり、『エッダ』や古英語詩『デール』の英雄的名匠の面影は片鱗もない。

《ニズング王がヴェーレントの足を不具にさせること》

120 王はヴェーレントの両足の腱を切断させる。下腿の前と、ひかがみの腱、それから足の甲と、かかとの上部の高い腱もた。かくして、ヴェーレントの命の続くかぎりには、その両足は歩行不能のままであった。ヴェーレントは哀れなありさまで王の館に伏していた。ある日彼は王にこう言う。「殿様」と彼は言う。「私はたしかにあまりにひどいことをいたしましたから、殿様が私の両足の腱をお切らせになったのも、もつともなことで存じます。これで私は命あるかぎり、殿のものを離れることはできませんし、たとえできたとしても、離れるつもりなどございません。」すると王が言った。「いやまことに、わしはお前のその言葉に報いをつかわそうと思う。つぐないとして、お前の欲しいだけの金銀をつかわすぞ。」王は鍛冶小屋を作らせ、ヴェーレントはそこに移された。今やヴェーレントはそこに座して毎日、金や銀、その他、鍛えられるかぎりの材料を用いて、王のために細工物をこしらえる。そして王にとっては、ヴェーレントがもはや逃げられないようになったことは好都合であり、われながらう

まく処理したものだと思う。ニズング王には四人の子がある。息子が三人、娘が一人である。

訳注

(64) 臍の説明が解剖学的に詳しいのが、いかにも十三世紀のサガらしい。

(65) 紙写本 A B では二人となっており、最後にニズング王国を継承したのは同名の長子である、という記述と矛盾する。

《王の息子たちがヴェーレントに鍛冶細工を頼むこと》<sup>(67)</sup>

131 ある日のこと、ニズング王の下の子二人が弓をたずさえてヴェーレントの鍛冶場に来、矢を作ってくれるように頼む。だがヴェーレントは、そんなひまはない、と言う。そしてヴェーレントは言う。「君たちが王子であっても、お父上のご希望にご依頼がなければ、私は何も君たちには作ってあげられない。それも今日のうちに依頼がなければだめだ。だが、それでも君たちがどうしても何かをこしらえてもらいたいのなら、その前にちょっと私の頼みを聞いてほしい。」その願いは何なのか、彼らは尋ねる。ヴェーレントは、新雪が降ったらすぐ鍛冶小屋に後向きになって来るように、と言う。男の子たちにとっては、後向きでも前向きでも、どちらでもいいことである。だが時は冬だった。その夜の内に雪が降った。次の朝、王子たちは太陽の出る前に鍛冶場にやって来る。ヴェーレントが望んだ方法でやって来たのだった。そしてヴェーレントに鍛冶仕事を頼む。

訳注

(67) 紙写本 A B ではここにヴェーレントの兄弟で弓の名人エギルが登場し、「我が子の頭上のリング射ち」を演じてみせる。

羊皮紙写本 Mb では、王子と王女に対するヴェーレントの復讐が完了してから、エギルは登場する。

《ヴェーレントが二人の王子を殺すこと》

132 ヴェーレントはもうぐずぐずしない。今やヴェーレントは扉をできるかぎり固く締め切り、男の子を二人とも殺して、ふいごの下の深い穴に投げこむ。その日から王子の姿は消えてしまい、彼らがどこに行ったのか、誰も知らない。王は二人が、鳥や獣を狩りに森に出かけたのか、それとも魚を取りに干潟に出かけたのだろうと考える。

食卓<sup>(68)</sup>につくべき時になって、彼らを探すが、どこにも見つからない。そこでヴェーレントのところにも人が来て、彼らが来なかったかどうか尋ねる。ヴェーレントは答えた。彼らはたしかに来たが、また出て行った。自分は彼らが王の館<sup>(69)</sup>の方へ帰ってい



くところを見た、と言った。「それぞれ弓と矢を持っていたから、森へ行ったものと私には思われます」と彼は言う。そこで人々は戻るのだが、そのとき、男の子たちの足跡が鍛冶小屋から出ていくように見えているのを見る。そこでこの件に関しては、誰もヴェーレントを疑う者はいない。<sup>(60)</sup>

#### 訳注

<sup>(59)</sup> 原意は「木の板」である *bord* が複数形 *borda* (属格) となっているのは、古くは各人に皿を兼ねた小卓が用意され、食後はそれを片づけた習慣から。今もオランダ語 *bord* は「皿」を意味する。ラテン語 *vicus* がゲルマン語に借用されて英 *dash, desk, Tisch*, 独 *Tisch*, スウェーデン語

*ben* 等、さまざまに分化して用いられているのと同じ事情である。(タキトウス『ゲルマニア』22章参照)

<sup>(60)</sup> 「ホール」は王侯の公邸にのみ用いられるので「館」と訳しておいた。厳密に考えると、王子たちが鍛冶小屋に来たとき(と人が思うはず)の足跡も、ついでいなければならないはずである。

#### 《王が息子たちを探させること》

133 王は何日間も息子たちを探させるが、彼らは見つからない。ついに皆はこれ以上彼らを探することに飽き、王も息子たちは森に行って獣に害されたか、干潟に出かけて海に吞まれたにちがいない、と思う。さまざまの想像もなされるが、そのどれひとつとして当たるものはない。だがヴェーレントは、以前わが身に加えられた不名誉と恥辱のことを常に考えていたのであった。というのも彼は残酷さに不足はなかったし、性格もたいそう冷厳であったのだから。さて彼は、今後もっとやれるかどうかともあれ、これで多少は報復できたものと考えた。

訳注

(61) ヴェーレントに対するサガの語り手の批判が初めて公にされる箇所である。(表題にはすでに111章に表われている。) 111章以降のヴェーレントの行為はそれ以前の騎士的振舞いと大きく喰いちがい、語り手の同情を引かぬもののようにである。114章も参照。

《ヴェーレントが王子の骨から細工物を作ること》

114 さてヴェーレントは男の子たち(の死体)を取り出し、骨から肉をすっかりこそぎ落とし、彼らの頭蓋骨に金と銀を張って二つの大きな卓上杯をこしらえる。肩甲骨と腰骨からはビール用の柄杓を作り、それにも金と銀をほどこす。他のいくつかの骨からはナイフの柄を作り、他の骨からは笛を、また他の骨からは鍵を、そしてまた別の骨からは王の食卓に立てられるべき燭台をこしらえる。どの骨からでも彼は何らかの食器類をこしらえる。もしこのようにひどい裏切りと奸計とが行なわれたのでなかったら、これらはすべて見事な宝物であるのだが。王が多くの貴顕の客を食卓に招くとき、これらはいつも卓上にある。

訳注

(62) 敵の頭骨で觸體杯を作るのは、元来はスキタイ系遊牧民の風習であった。ゲルマン人の間では稀である。

(63) *Kettstuka* : 中低独語からの借入語。

(64) 訳注(63)と(61)とを参照。

《王女の黄金の腕輪がこわれること》

125 ある日のこと、王女は侍女を連れて庭園に出たが、そのとき自分の一番良い金の腕輪を折ってしまい、腕輪はもう役に立たなくなった。彼女はそれを父にも母にも告げる勇氣がなく、こんなまずいことが起きてしまったが、何かよい考えはないかと侍女に尋ねる。すると侍女は答えた。「ヴェーレントならわずかの時間で直せます。」二人ともこれは良い考えであるように思う。そこで侍女はヴェーレントの鍛冶小屋に出かけ、腕輪を修理してもらうために王女様が自分をここにかわされたのだ、と言う。ヴェーレントは答えて言う。自分は王の命令がなければいかなる細工もしないと。すると侍女は言う。「王女様がお望みのように修理をしてくれたからといって、王様がそれに立腹なさるはずがありません。あなたなら王女様のためにそれをやるこ

とができます。王女様は腕輪の修理ができないいうちは、お父様にもお母様にもそれを見せないおつもりなのです。あなたはとも感謝されますし、もし王様がこれを知ったら、きつとあなたにお目をかけて下さるでしょう。」ヴェーレントは答えた。「あなたの言う約束をそのまま受けとるわけにはいかない。だが王女様がご自身で来られるなら、私は私が良いと思うようにいたします。」侍女は戻って王女に、王女自身がヴェーレントのところにおもむかないと彼は修理をしない、と言う。しかし王女は言う。「それはかまいません。もしあの人、そうすれば細工をしやすいい言うのなら。でももしやってくれなかったら、あの人には私からは何も良いことを期待できないことになるのです。」

#### 訳注

(63) 「エッダ」では *Boðvindr*, 古英語詩「デール」では *Beaðvindr* という名を与えられているが、「シーズレクのサガ」においては、羊皮紙本 Mb と紙写本 B は名をのせず、紙写本 A に *Heren* という名が一度記されているだけである。

(66) *þa geri ec sem mer syniz* : 底意のある表現であり、続く事件の伏線となっている。A 本、B 本にはこれはない。

(67) 王女の勝気さを表わすこの言葉は Mb 本のみにある。

《王女が黄金の腕輪をヴェーレントに修理させようとすること》

176 王女は侍女と二人で出かけ、ヴェーレントに会う。王女は鍛冶小屋に入り、腕輪を直してくれるようにヴェーレントに頼む。すると彼は、その前に別なものを鍛えるのだ、と言って、扉をしっかりと閉ざし、王女のもとに身を横たえる。それが終ると彼は、二人が別れる前にあの腕輪を直す。腕輪は今や、こわれる以前よりももっとずっと良くなっている。そして二人は、起こったことをしばらくの間は秘密にしておく。

#### 訳注

(68) この文面によると、侍女は外で待っていたものと思われる。A 本と B 本では、王女は一人で鍛冶小屋に出かける。大英博物館所蔵の「フランクスの小箱」*Frank's Casket* に刻まれたヴィーラント伝承の場面には、侍女らしき女性が鍛冶小屋の外に立っている。ただし「小箱」のシーンの解釈は千差万別で、定説はまだない。

(69) 相当卑猥な表現である。Mb 本だけにあり、前注(68)と同様、Mb 本作者（修道僧？）が下世話な表現に通じていたこと

をうかがわせる。

- (70) 『エッダ』の「ヴェルンドの歌」では、ヴェルンドがベズウィルドに暴行したことになるが、『シーズレクのサガ』ではこの点はややあいまいである。ただしA本とB本では「彼は彼女をつかまえて」という一文がある。後章（二二九）で二人は愛を誓うことになっており、彼らがディートリヒ大王旗下の勇士ヴィズガ Vigga の両親となる系譜上、『エッダ』のような粗野さを除き、ヴィズガの出生を正常なものとしようという編集上の意図が働いたものであらう。

《ヴェーレントの弟エギルがニズング王の家臣団に加わること》

117 ちょうどその頃、ヴェーレントの弟である若きエギルが、ニズング王の家臣団に加わる。それはヴェーレントが彼に使いを送っていたからである。エギルはあらゆる男の中で最も美しい男であり、ひとつの点であらゆる男に優れている。彼は他の誰よりも弓を射ることがうまいのだ。王は彼を歓迎し、エギルはここにしばらく留まる。王は、エギルが本心に嗜どおりの名射手かどうか、試してみようと思う。彼はエギルの今年三歳の息子連れて来させ、その子の頭にリングをひとつのせ、頭の上の方でもなく、また右側でも左側でもなく、そのリングだけを射るようエギルに命じた。だが男の子を射ることはエギルには禁じられなかった。彼にその能力がありさえすれば、何はともあれそれだけはいないだろうということが、王には自明のことと思われたからである。そして矢は一本しか射てはならないのだ。

訳注

- (71) 『エッダ』ではエギルはヴェルンドの次兄となっており、特に弓の名人とも呼ばれていない。しかし「フランクスの小箱」の彫刻画には弓を射る男がエギルというネームつきで描かれており、ヴィーラント伝承とエギルが古くから結合していたことは、疑えない。

- (72) handbogi: 一般の半月形の弓のことで、弩 lasbogi と区別するため hand- を付す。

《エギルがどのように矢を放つかについての話》

128 エギルは矢を三本取り、矢羽根を短い（一本を）弦につがえ、リングの真ん中に射当てる。その矢はリングの半分をもぎ取って、二つとも同時に地に落ちた。この名技はその後も長いこと語り伝えられた。王の感銘もはなだ大きく、エギルはあ

らゆる男の中で最も名高き者であり、人々は彼を「エルルーンのエギル」と呼ぶ。ニズング王はエギルに、ただ一矢のみ許されていたのに三本の矢を用意したのは何故か、と尋ねる。エギルは答えた。「殿様」と彼は言った。「私はあなた様に嘘は申したくありません。もし第一矢が私の息子に当たったなら、二本の矢をあなた様にお見舞い申したことでしょう。」<sup>(74)</sup>しかし王は気を悪くしない。皆は、よくも大胆に言ったものだ、と思った。

#### 訳注

(73) この箇所は Mb 本のみで、A 本 B 本にはない。「エルルーン」Orin は『エッダ』の「ヴェルンドの歌」に登場する三人の白鳥乙女の一人で、エギルの妻となった。だから Mb 本作者は「ヴェルンドの歌」自体を知っているか、あるいは少なくともエギルとエルルーンの結びつきを知っているわけである。他方、ここに用いられている Orinar を複数形と取れば、直接には白鳥乙女エルルーンを指すのではなく、「麦酒 (ale) のルーネ文学」、つまり「麦酒の悪酔いを防ぐ呪文を心得ている」(H. Kuhn) というほどの意味であるとも考えられる。しかし次に見るように「麦酒のルーネ」は女の裏切りを防ぐルーネでもあるから、やはり夫エギルを見捨てる白鳥乙女エルルーンとの関連は否定しがたい。『エッダ』の「シグルドリヴァの歌」Sigdrifomál の七節には、「信じている女に欺かれたくなかったら、麦酒のルーネを知らねばなりません」(谷口訳)とある。

(74) だれでもがウィリアム・テルの有名なシーンを思い浮かべるこの「頭上のリング射ち」モチーフは、このサガより数十年前早い Saxo Grammaticus の “Gesta Danorum” に弓の名手 Toko の話として登場するのを最古の例として、十六世紀までの各地に八例ほど見られる。A. Heuveler は、北ドイツに伝わっていたエギルの話が北欧や英国に、その土地の名射手の名と結びついて広まったと推定 (Hoops, Reallexikon)。テルの話は一四七〇年が初出である。

#### 《ヴェーレントが王女と話し合うこと》

129 さて今やヴェーレントは、彼が受けた恥辱に対して復讐をした。これが露見したら、王が彼を殺させるであろうことは明白である。そこで彼は弟のエギルを呼び寄せて、王女と自分が話し合うことができるよう取りはからってくれと頼む。エギルはそうする。そこで彼らは出会い、多くのことについて二人だけで話し合う。その話の中でヴェーレントは、王女以外の女を妻にするつもりはないと言う。すると彼女も、ヴェーレント以外の男を夫にするつもりはないと言う。そして二人とも嬉しい。<sup>(75)</sup>それ

からヴェーレントは彼女にこう言った。「あの時に私はお互いの衣服を取りかえておいたのだ。君は子供を生むだろう。そしておそろくそれは男の子だろう。もし私が彼を見ることがないとすれば、私が彼のために武器を鍛え、それを水が入り風が吹き出るところに隠しておいたと、彼に伝えてほしいのだ。」それは彼が火床を冷やす所のことだった。こうして二人は別れた。

訳注

(㉞) この124章においてサガ作者の、ヴェーレントと王女の関係をハッピーエンドに終らせたい努力が特に明瞭となる。126章においても暴行をうかがわせる描写はほとんどないが、この章では遂に二人は愛を誓うにいたる。ヴェーレントの息子であるゴート族の勇士ヴィズガの出生に、一点非のうちどころがあってもならぬからである。

(㉟) 衣服交替は豊饒多産を願うまじないであった(ドイツ迷信辞典IV一五二以下)。

(㊱) ヴェーレントが将来に息子ヴィズガに譲るべき武器類、その隠し場所、そしてヴェーレントがその生涯において息子と会うことは一度もないかもしれない可能性等は、Mb 本ではこの章以外ではふれられておらず、bindes Motiv となっている。ところがアイスランド語紙写本AとBでは、ヴェーレントはめでたく平和裡に王女を妻とすることができたので、「王女は武器類をヴェーレントが彼女に教えた場所から探し出す必要はなかった。彼自身が埋めておいた火床の下から自分で取り出したからである。そこで火床を冷やしたから、風が吹き出て水が入るところ、と言ったのである」(Bretchen 133頁、47章)とあって、結局 Mb 本とA本B本を対校することによってのみ、この章は理解できることになる。写本間の系統関係を知るために重要な箇所であろう。

ヴィーラント伝承の研究にいつそう重要かもしれないことは、ヴィーラント父子は生前会うことがなく、息子がそれを持って活躍する名剣ミムングは、実はヴィーラントが息子のために鍛冶場の火床の下に隠しておいたものだ、というような伝承が一部に広まっていたと想像されることである。

《ヴェーレントが羽衣を作ること》

130 あるときヴェーレントは、弟エギルに大小を問わずあらゆる羽毛を集めるよう頼み、これで翼を作るのだ、と言う。エギルは森に行つてあらゆる種類の鳥をつかまえ、ヴェーレントに渡す。するとヴェーレントはそれで翼をこしらえる。出来あがるとそれは、まるでグリフィンか禿鷹か、あるいは駝鳥と呼ばれる鳥から剣ぎとった羽衣のように見えた。

訳注

(76) 羽衣: 全ての古ノルド語文献中このサガのみに登場する単語で、おそらく中低独語 *fliegende* を借用したもの。ところが本章では *cinn flygill* として単数形で用いられており、「羽衣」*flaohunn* と同義であることが明らかである。一枚では用をなさぬはずの「翼」という原義が、この段階ですでに忘れられていたのだらう。

(77) 「ヴェルンドの歌」には類似の記述はないが、大英博物館の「フランクスの小箱」には、鳥を捕まえている男が描かれている。ただしその男がエギルだという証拠はない。

(80) ...af grip eða af gamb eða af þeim fygler struz heitr: gripr と gamb は同じ想像上の怪獣グリフィン（頭と翼が鷲で胴はライオン）を指すとする説と、たがいに少し異った種類の猛禽を指すとする説がある。前者はラテン語 *gryphus* が中低独語 *grip* を経て北欧に入り、後者はロマンス語由来の中高独語 *gampilun* から取り入れられたものと考えられる (*De Vries*; *Johannesson*)。駝鳥 *struz* (中低独語 *Strus* から) とこの *grip* は全ての古ノルド語文献中このサガにしか現われぬ言葉である。

ヴィーラント伝説を描いたゴトランド島の画像石 *Arde III* には大きな怪鳥の姿が見られるが、グリフィンや駝鳥よりはコンドルを思わせる。そこでこの訳文では、グリフィンと並んで禿鷹という訳語も用いることにした。

《エギルがまず羽衣を試みること》

III さてヴェーレントはエギルに、できあがった物の中に身を入れて飛んでみて、果して役に立つかどうか試すよう頼む。するとエギルは言った。「どのように飛び上がり、また飛んで、そして降りたらよいのかな？」ヴェーレントが言った。「風に逆らって飛びあがるのだ。それから高く、また長いこと飛んで、降りるときは追風を受けてすることだ。」そこでエギルはすばやく羽衣の中に身を入れ、空中高く飛びあがって最も敏捷な鳥のように楽々と飛ぶ。そして降りようとするとき、頭を下に落ちて大地に激突し、ほとんど気を失なう<sup>(81)</sup>。彼の耳とこめかみは、それほどひどく騒音をかなでたのだった。するとヴェーレントが言った。「弟のエギルよ、この翼は少しは役に立ったかね？」

訳注

(81) 弟エギルが飛行に失敗し、兄ヴェーレントが成功するというモチーフには、ギリシャ神話のダイダロス（父）とイカロ

ス(子)の物語が影響していることは明らかである。そもそもタイダロス伝説とヴィーラント伝説の間には、名人鍛冶が抑圧者のもとから自分が作った飛行衣で脱出するという基本的な一致があり、何らかの關係は否定しえない。またエギルという名の祖形は \*Agiar で、これはイカロスという外国名を似た発音のゲルマン語に置きかえたものだという説がある。(J. De Vries, *Betrachtungen zum Wiedandschnitt in der Þórðarsaga*, in: *Arkiv för nordisk filologi*, 65, 1950)

《エギルが羽衣について語ること》

132 するとエギルが言った。「もしこの翼が、飛ぶのと同じように降りるのにもうまくできていたら、今頃私は他の国に行っていて、兄貴にこれを渡しはしないんだが。」ヴェーレントは言った。「悪いところを直すでしょう。」そしてヴェーレントは、弟エギルの手を借りて羽衣を身につけ、まずある家の上に、それから空中高く飛びあがって、こう言った。「追い風で降りるように言ったのは、わざと嘘をついたのだ。この羽衣がこれほど調子が良いと知ったら、お前はもう返しはしないだろうと思ったからな。どんな鳥も逆風で降り、昇るのも同じだということは、お前も心得ておかなくてはいかん。さて弟よ、これから私がどうするつもりか、教えておこう。実は私は故郷に帰るのだ。だがその前にニズング王と会って話をする。しかし、もしそのとき私が王の気にさわることを言えば、王は私を射落とすようお前に強いるだろう。そうしたら私の左腕の下をねらってくれ。ニズング王の息子たちの血が入った(皮)袋がそこには結びつけてある。私らが親族だということを、お前が少しでも大事に思うなら、私の身には何も危険が生じないようにお前はうまく射てるはずだ。」

訳注

⑧ 嘘を教えてエギルを墜落させ、皮肉な口ぶりで真相を明かすヴェーレントは、かなりの小人として描かれていると言わべきである。王子の血を入れた皮袋を射させようというのいまいやみな小細工であり、このヴェーレントにはいわゆる「ゲルマン的英雄」の面影は皆無である。

《羽衣を着たヴェーレントのこと》

133 さてヴェーレントは王の館の一番高い塔に飛ぶ。王は多くの家臣と共に広間に向かって歩いている。彼はヴェーレントを



見てこう言った。「お前は今は鳥なのか、ヴェーレントよ。さまざま不思議なわざをすることよ。」するとヴェーレントが言った。「殿様、私は今は鳥でもあり、人でもあります。そして今ここを去ろうとしています。殿様のお命がこれからどれほど長くとも、もう決して決して私の身を意のままにすることはできませんぞ。」

#### 訳注

(89) turn…中低独語からの借入語。

《ここでヴェーレントがニズング王と自分との因縁を語ること》

134 「大きな危機と大軍が戸口のすぐ外に立っていると考えたから、あなたは私に自分の娘と領土の半分を約束したのだ。それが最初の取りきめだった。ところがあなたは私を法外者に、追放者にしてしまった。私が必死で身を守り、先に私を殺そうとした者を殺したという理由で。あなたはそれを私と手を切るために利用し、私の苦勞に無慈悲に報いたのだ。だから私はいかに無力で悲惨な立場にあったときも、このことは決して忘れはしなかった。だから私たち二人の間には、不和に不和が重なったのだ。あなたは私の両足の腱を切断し、そのかわりに私はあなたの二人の息子を殺してやった。証拠はあなたの卓上杯だ。その中味は二人の頭蓋骨なのだから。あなたの一番高級な食器類にはすべて、二人の骨が使っている。さて、もう何もかくし立てはすまい。私が先程言ったような、私に対するあなたの悪事のすべては、あなたの娘がつくなってくれた。私が彼女の衣服と私のを取りかえたときのことだ。娘御は今身重であるようだ。相手は私というわけだ。私とあなたの因縁は、こんなふうに終わりましたな。」<sup>(89)</sup> こうしてヴェーレントは空高く飛昇する。

#### 訳注

(90) alløgr…特にノルウェーの法律用語で、Tölaus と同義である。一切の法律による庇護を失ない、殺されるか餓死する

か、国外に出るか、の可能性しかない。

- (85) 134章でヴェーレントが王に語る内容は、「ヴェルンドの歌」と大差はない。「ヴェルンドの歌」では、妊娠した王女を王が責めぬよう、また殺さぬようにヴェルンドが王に誓いを立てさせる歌節(33節)があって、冷酷な物語の中に一抹の温みがあるが、「サガ」のこの場面にはそれはない。

《ニズング王がエギルに、ヴェーレントを射るよう命ずること》

135 するとニズング王は言った。「若いエギルよ、やつを、ヴェーレントを射落とせ。」エギルは答えた。「私の兄にそんなことはできません。」するとニズング王は言う。もし射たないのならエギルは死刑だと。そして更に、エギルは兄の悪行ゆえにすでに死に値するのだ、と言う。「貴様が命をあがなえる方法はただひとつ、やつを射落すことだけで、他にいかなる手もないぞ。」エギルは矢を弓絃につがえ、ヴェーレントの左腕の下に射当てる。すると血が地面に降ってくる。すると王もその家来たちのすべても、これでヴェーレントの命も終わりだ、と言った。ヴェーレントは故郷のシヨランドに帰り、彼の父、巨人ヴァージの所領であつた土地に住む。ニズング王はその後すぐ病いを得て、まもなく死ぬ。オトヴィン<sup>(87)</sup>という名の息子が後を継ぐ。彼は誰にも好かれる人柄で、妹に対しても優しい。

訳注

- (86) 以前の「頭上のリング射ち」と核心においてはほぼ同じモチーフである(暴君による強制、名技によって危機を脱する。血を入れた袋を射て衆目を欺くという小細工も、弓の名人エギルを登場させた構成上、必要不可欠な装置ではあるだろう。

- (87) Orvin: 中高独語 Orwin の中低独語形と思われる。A本とB本では父の名を襲って「ニズングとも言った」とある。

《玉の如き男の子、ヴィズガが生まれたこと》

136 王女は産褥につき、男の子を生む。名が付けられて、ヴィズガと呼ばれる。<sup>(88)</sup>ヴェーレントはこの出来事のすべてをシヨランドの家で聞き、ユトランドのオトヴィン王のもとに使いを送って和解を申し出る。王の方もヴェーレントとの和解は望むところで、会談の間の身の安全を確約する。ヴェーレントはユトラランドにおもむき、そこで厚遇される。オトヴィン王は妹を正式に

ヴェーレントに嫁がせ、それからもし望むならずっとこの地にとどまるよう彼に申し出る。しかしヴェーレントは、やはり自分の故国の父親に譲られた家屋敷に戻るのが良いと思う、と王に答える。しかし自分は、と彼は言う、王がこれまで示してくれたあらゆる善意を、あだやおろそかには思わないと。オトヴィン王はヴェーレントの望むままにさせ、今後の親交を約束する。こうしてヴェーレントは、妻と三歳になる息子ヴィズガを連れてシヨランドに帰る。王は彼にたくさんの品物と財宝を贈り、二人は今や親しい友として別れる。そしてヴェーレントはその後も長い歳月をシヨランドで送り、その技の巧みさとあらゆる発明の才によって、世界の北半分にあまねく名高いのである。<sup>(91)</sup>

#### 訳注

(88) *Vinga* : 言うまでもなく、ヴィルキヌス、ヴァージ、ヴェーレント、というこれまで三代「ヴ」の頭韻を保ってきた男子家系の四代目として、この赤ん坊も「ヴ」で始まる名をもたねばならない。なおA本とB本では、ヴィズガが生まれてから祖父ニズングは死ぬことになっている。

(89) 第二人を殺され、妹を犯され、おそらく父の死もそれゆえであろうと思われるのに、オトヴィン王の心の広さは驚くほどである。『エッダ』やこのサガと同時代の多くのサガにもほとんど類を見ない好人物であるが、ヴェーレントと王女との関係をハッピーエンドにして、次の物語の主人公ヴィズガの出生を非の打ちどころのないものとするために、でっちあげられた仏の如き人物であらう。

(90) ヴィズガが父ヴェーレントに初めて会うのが三歳の時であるということに、何か特別の伝承でもあるのかもしれないが、不明である。

(91) 「世界の北半分」 *vn alla norðhalfo heimsins* : はほぼヨーロッパに相当し、北ヨーロッパのことではない。前注⑧参照。

#### へま と め

一二二章以降がいわゆる「名匠ヴィーラントの復讐譚」であるが、一一九章までは、ヴェーレントが王によって足の腫を切られ、捕囚鍛冶となるまでの前史であり、本来のヴィーラント譚とは無縁の、後世の付着要素と思

われる。一二〇章から一三五章までがほぼ『エッダ』の「ヴェルンドの歌」に対応する部分、すなわち王子と王女に復讐をとげ、空を飛んで逃げながら王と問答を交わす部分である。「ヴェルンドの歌」との差異は、(1)弟エギルが登場してかなり重要な役割りを果たすこと、(2)王女と愛を誓い合うこと、(3)王妃が全く登場しないこと、などである。一三六章ではヴェーレントと敵王（の遺児）の和解が語られる。ヴェーレントは晴れて王女を妻とし、その間に生れていた将来の英雄ヴィズガをもとなつて帰国、名匠として名を全ヨーロッパに残すというハッピーエンドであるが、訳注で何度かふれたとおり、これはディートリヒ大王旗下の諸勇者伝であるこのサガの構成上、是非ともそうあらねばならないために加えられた章であり、本来のヴィーラント伝説とは無縁である。②の王女と愛を誓い合うことも、このための伏線と考えるのが妥当である。

弓の名人エギルの登場は、(1)兄ヴェーレントが必要とする羽衣用に鳥の羽毛を集めるため、また（こちらの方がより重要であるが）(2)空高く飛んで逃げてゆくヴェーレントを弓で射つよう命じられるという、クライマックスの緊張感をいっそう高めるため、である。「ヴェルンドの歌」ではただ兄として言及されるだけであるから、このサガでのエギル登場は単に筋構成の必要上あらたに考案されたものとも思えるが、実は（これも既に訳注でふれておいたとおり）大英博物館所蔵の「フランクスの小箱」（八世紀）のヴィーラント伝説描写中にエギルはつきりと描かれており、さらに鳥を捕まえている人物像もそこに見出されるので、やはりヴィーラント伝説の古層に属する人物としてサガにも登場しているものと考えたい。とりわけ重要なことは、一二八章においてエギルが（かなり唐突に）「エルルーンのエギル」と呼ばれたと書いてあることである。これは、訳注⑦に記したように、Mb 本筆者（A 本 B 本にはこの記述はない）が「ヴェルンドの歌」を知っていたか、あるいは少なくともエギル

と白鳥乙女エルルーンの関係を知っていたか、このどちらか（あるいは双方）であることを物語る。エルルーン Orlas とは「麦酒（*o*）のルーネ文字」という意味で、女の男に対する裏切りを防ぐためのルーネ文字のことであつたらしいから、白鳥乙女を一度は妻とし、そして失なうヴィーラントたち三兄弟には、至極縁の深いルーネ文字なのである。「フランクスの小箱」の彫刻でエギルは、一人の女がいる建物を守るかのように、その前に立ちただかつて弓を引きしぼっているのだが、おそらくこの女が白鳥乙女にしてヴァルキューレのエルルーンなのであろう。

ただし、このサガにおいてエギルが演じて見せる「息子頭のにせたリング射ち」（一二七、一二八章）は、サクソが記しているトコの最古例以来、ゲルマン人の間で弓の名人の美技としてよく知られていたエピソードで、必ずしもエギルのみの例ではなく、ましてヴィーラント伝説に固有の要素とは考えられない（訳注⑦参照）。

またヴェーレントが弟エギルに羽衣を試着させ、わざと嘘を教えてまっさかさまに落下させるユーモラスなシーンがあるが（一二三章）、ここにダイダロスとイカロスの有名な伝説の遠い反映を見ることは、まちがいでない。あるまい。（イカロスとエギルという名前にある種の対応を見出そうとする説については訳注⑧を参照）。

ヴィーラント伝承の祖形を探そうとする時、この『シーズレクのサガ』を検討して得られるほとんど唯一の新しい可能性は、以下のものである。実は父ヴェーレントと息子ヴィズガは生前は一度も対面することなく、後に息子は母、つまり王女、から聞いて、ヴェーレントが彼のために隠しておいた場所（鍛冶小屋の金床の下）から名剣ミムングを取り出し、それによって名匠の嫡子として世に認められ、ディートリヒと大王膝下の英雄となる——このような伝承がより古くは広まっていたのではないだろうか。訳注⑨にもふれておいたが、この仮説は羊

皮紙の Mb 本一二九章と、紙写本 A 本と B 本四七章とをつき合わせることによつてのみ、得られるものである。つまりより古型を保つ Mb 本筆記者は、結果をハッピーエンドにすることによつて次章からの新しい主人公ヴィズガの登場をより道徳的に飾ろうと、いろいろ話の筋に手を加えたのであったが、ついうっかりしてヴェーレントと王女の「ご対面」の場で古い伝承——つまりヴェーレントがこれから生まれる息子のために名剣を隠しておくという——を取り残してしまった。後に Mb 本をもとに、より合理的に編集した A 本と B 本筆記者は、この齟齬をとりつくりうたむにつじつま合わせの文を挿入したのである。ところが肝心の、Mb 本に紛れこんでいる古い部分を書きとめることをしなかったために、現状のような、互いにそれのみでは不完全なものとなつてしまつたのであろう。ヴェーレントが息子ヴィズガに初めて会つた時、彼が三歳になつていたという (Mb 本一三六章) ことにも、何か意味があるように思われるが、今のところはこれ以上は不明である。

「ヴェルンドの歌」においては、ヴェルンドの足の腱を切るよう王にすすめたのは王妃であり (一七歌節)、王が「お前のすすめが、わしの破滅のもととなつたのだ」(二三歌節、谷口訳)と嘆くように、王妃が重要な役割を果たす。しかもこの王妃は「賢い王妃」*kunnig qvan* として、『エッダ』全体でもきわめて稀な美称 *kunnigr* を付して呼ばれており、元来は巫子的性質を備えた人物であつたという推定もなされてゐるほどである (*Bouman, Volundr as an aviator, ANF 55, p. 29*) のだが、『シーズレクのサガ』においては王妃はその存在すら言及されない。『エッダ』の時代 (九世紀) まではあつた王妃についての記憶が十三世紀には失なわれたのか、それとも『エッダ』の王妃が特に北欧独自の登場人物であるのか、今の段階では不明としか言いようがない。

最後に、『エッダ』との大きな相違として、『エッダ』には一言もふれられていない羽衣製作があげられるが、

これはむしろ『エッダ』のあまりに簡潔な文体に責任があると私は見たい。王に奪われた腕輪が飛行腕輪で、王女からそれを取りもどしたからヴィーラントは復讐成就後、突如として飛行できるのだという説が古来強いが、異論も多い（その詳細は R. Nedoma, S. 155 以下参照）。サガ作者が『エッダ』を知っていたとして、この欠落部分に羽衣製作エピソードを推測し、自らのサガにはそれを補充したことは、より合理的筋立てを好むサガ作者としては不思議ではない。

以上、ヴィーラント伝説の古型を推測させる要素を『シーズレクのサガ』から抽出してみたが、次に、このサガのヴェーレント物語自体の特徴を簡単にまとめておく。

(一)、ヴェーレントの社会的位置について。ヴェーレント物語の前半においては、ヴェーレントをなるべく「優雅な作法を身につけた」（九三章）、「もとの家柄が良い」（九四章）、そして立派に騎士らしく馬をあやつることができる（一一四章）文武両道の騎士に仕立てようとする傾向が見られるが、一一六章でヴェーレントは内膳頭に「つまらぬ鍛冶屋の分際で」と罵しられ、たとえ「王のもとで丁重に名誉をもって遇され」（一一一章）てはいても、高級騎士階級からは卑しめられていたことがわかる。この事実は一三七章、ヴェーレントの息子ヴィズガを主人公とする物語の冒頭において、父に鍛冶の職を継がないかと尋ねられたヴィズガの答えの中にもはっきり読みとることができる。「お袋さまの（家柄の）ために、ばくの手がハンマーの柄や、やっとこなど握らなくてすむよう神様が配慮してくださいますように！」（firir saker minns modernis þa vilu gvið at minn hond komi aldregi a hamar scapt ne atangar arm.）古代ゲルマン社会においてヴィーラントという名人鍛冶がどのような社会的地位にあったかはともあれ、このサガが成立した十三世紀の北ドイツ、ノルウェーなどでは名匠ヴェーレ

ントは、この程度の地位しか占めていなかったのである。

(二) サガ作者のヴェーレントに対する消極的評価。——このサガ全巻を通じて言えることであるが、登場人物はひとりとして完全無欠なスーパーマンではなく、最大の主人公であるはずのシーズレク大王（ディートリヒ大王）ですら俗臭強い人物として描かれる。ヴェーレントも例外ではなく、それどころか一二四章では作者から「残酷さに不足はなかったし、性格もたいそう冷徹であったのだから」とわざわざ断罪されていさえる。本当の名剣ミムングは隠して王にはにせものを献上し（一一〇章）、追放された腹いせに料理人になりまして王女に毒（媚薬？）を盛り（一一九章）、王子を殺すにも王女を妊娠させるにも小細工を弄し（後の場合にはかなり卑猥な言葉さえ使い）、弟エギルに羽衣を試させるときにも嘘を教えて墜落させる（一二一章）等々、ヴェーレントの行爲を見ていると、あまり共感をいだくことのできない卑小な人物として描かれていることがわかる。そもそもこのサガ作者は鍛冶屋に対する評価が低いらしく、ヴェーレントの父ヴァージを謀殺した二人の小人の鍛冶屋（八九章）も、高漫ちきで「腹悪い」おかかえ鍛冶アメリカス（一〇二章）も、作者から好意をもって描かれてはいない。もっともこれは、岩石から金属を取り出す鍛冶屋が魔法使いと紙一重の存在と見なされた古代や中世においては、かなり一般的な傾向であったとも考えられよう。

以上の二点の他、雑多なメルヒェンの素材をたくさん取り入れながら、その一方では現実的視点を常に忘れず、話の筋の唐突さをやわらげるための合理化の傾向も強い（その最も代表的なのが、ヴェーレントの羽衣製作である）という特徴があるが、これらはすべて『シーズレクのサガ』全巻を通じての特徴であって、ことさらヴェーレント物語独自のものではない。まして「名匠ヴィーラント伝説」の古層の残欠を拾集するのが主目的の

本稿にはあまり重要ではないので、それらについては最少限を注記するにとどめた。ヴェーレントの物語を伝える写本相互の関係も非常に興味深い問題ではあるが、これも本稿では正面からは扱わなかった。（この方面については R. Nedoma, *Die bildlichen und schriftlichen Denkmäler der Wielandsage*, Göttingen 1988 が要領よくまとめている。）

〔一〕

前回と今回使用した挿画は、Annemarie Nagelsbach の木版画『Wieland der Schmied, Neudichtung von Otto Hauser, Weimar 1926』から採った。同書はヴェーレント伝説は実はオリオン伝説だという奇矯な見解をもつが、版画は好ましい。ただし、王子殺害のシーンは「エッダ」にもとづいており、また足の腿を断たれているはずのヴェーレントが立っているなど、不適切なところもある。